

ミャンマーの歴史

NPO ザ・コンサルタンツ ミャンマー理事長
中小企業診断士 都築 治 (Aung Moe)

1 ミャンマーの歴史

(1) モン族とシュエダゴンパゴダ

ミャンマーには古来幾多の民族が移り住んだが、同国の歴史はシュエダゴンパゴダ建立の伝説から始まると言ってもよい。お釈迦様在世のみぎり、インドを商用で旅していたモン族の兄弟が、釈尊が悟りを開かれたとの報を聞きゴータマ仏陀に面謁し8本の聖髪を賜った。兄弟から聖髪を譲り受けたモン族の王は、聖髪を丘の上に安置しストゥーパを建立した。当初の高さは9mほどであった。シュエダゴンパゴダ原初の物語である。

その他、仏陀にまつわる伝承がミャンマーにはいくつか存在する。伝承で見られるようなモン族の王国が、紀元前からミャンマーの南部に存在していたことは確かなようである。

(2) ピュー族の王国とバマー族の南下

1・2世紀頃からはピュー(驃)族の王朝が出現した。ベイターノ、ハリンジ、タイエキットヤ等々の王国である。ピュー族の遺跡からは、多くの仏教に関わる遺物が出土し、古来ミャンマーの地に仏教が伝来していたことの証となっている。

中国の南詔によって、9世紀にピュー王国は滅亡し歴史の舞台から去った。代わって勢力を伸ばしたのが、雲南から高原地帯を中心に南下したバマー(緬甸)族である。彼らの最初の定住地はマンダレー南方のチャウセー地方である。チャウセー地方は灌漑農耕が盛んであった。バマー族は当初騎馬民族であったが、定住するに従って農耕民族となった。

(3) バガン朝

バマー族の最初の王朝はアノーヤター王によるバガン朝で、1044年からフビライの元によって1287年に滅ぼされるまで約250年間続いた。今に残る広大なバガン遺跡は、この時代のものである。アノーヤターはモン族のシン・アラハン(アロハン)を師として、広く仏教に帰依した。王は仏典の譲渡をモン王に申し入れたが、拒絶されたためその都タトンを攻略した。バガンには、経典と奴隷にされたモン人が多数連れて来られた。マヌーハ寺院で知られるマヌーハはこの時のモン族の王様である。彼はパゴダ奴隷として、新設されたシェジーゴンパゴダで生涯使役されることとなった。バガン朝では3代のチャンシッター王も名高い。バガンで優美さを誇るアーナンダ寺院は、チャンシッターが建立したものである。

現在のミャンマー国民の篤い信仰心は、モン族やピュー族の影響による所が大きい。

(4) シャン王朝とモン王朝

バガン朝滅亡後は、シャン族やモン族が勢力を伸ばした。ピンヤ、ザガイン、インワなどを中心とする上ミャンマーでは、シャン系の王朝が約250年間続いたが、安定した政権ではなかった。下ミャンマーでは、バゴを本拠とするモン族のハンターワディ朝が栄えた。この時代のバマー族は、脇役としての地位に留まった。

(5) タウンゲ朝

バガン朝崩壊後、シャン族の支配化に置かれることを嫌ったバマー族は、シッタウン川上流のタウンゲ(ヤンゴン北方200km)に徐々に集結した。タピンシェエティーはポルトガルの傭兵

を活用してタウンゲー朝（1531～1752）を建国した。タウンゲー朝で最も著名な王は2代のバイナウンで、チェンマイ、アユタヤ、ピエンチャン等を征服した。

バイナウン亡き後シャム（タイ）と抗争を繰り返す、タウンゲー朝は勢力を盛り返したモン族により滅ぼされた。

（6）コンバウン朝

ミャンマー最後の王朝はバマー族によるコンバウン朝（1752～1885）で、アラウンパヤーはモン族との長い抗争を制し、ダゴンをヤンゴン（宿敵絶滅、戦いの終わりの意）と改名した。コンバウン朝は、西はアッサム、マニプール、東はアユタヤ、また独立国ラカイン王朝を征服し、さらには清の乾隆帝の侵攻を4度にわたり阻むなど、東南アジア最大の強国となった。3代目の王シンビューシンによるアユタヤの徹底的破壊（1767）は、怨恨として現在のタイ人の記憶に深く刻まれることとなった。

（7）イギリスによるミャンマー領土化

ミャンマーの資源確保を狙う欧米列強は、コンバウン朝の拡大主義に因縁をつけた。3度に及ぶイギリスとの戦い（1次1824～26年、2次1852年、3次1885～86年）によって、ミャンマーの国土は完全にイギリスの領土となってしまった。バマー最後の王ティボーは囚人のごとくインドに追いやられ、王子は処刑、王女は英軍の兵卒の女にされた。イギリスによる巧妙な分割統治により、多くのバマー族は軍人、警官、官吏の職に就くことを許されず、小作人として下層階級の地位に留まることを余儀なくされた。

1942年バマー独立義勇軍と共闘した日本軍がイギリスを追い払うまで、およそ120年間にわたってイギリスの植民地の地位にあった。独立義勇軍には、アウンサンやネウィンら伝説の30人志士が参画した。

（8）大戦後

第2次大戦後の1947年、アウンサンに反感を持つイギリス将校の策謀によって、32歳の青年アウンサンは凶弾に倒れた。その後、共産主義者や権益の確保を図る少数民族による内乱や、3度に亘るウ・ヌー政権等を経て、1962年から88年までネウィン将軍による社会主義の政権が続いた。ネウィンにより多くのインド人や中国人が国外に追いやられた。

ミャンマーの社会主義は、マルクス・レーニン主義によらない「バマー式社会主義」と言われる独自の社会主義で、中立・鎖国的な政策を執った。鎖国政策を選択したことにより、結局は世界の動きから取り残されることとなった。

経済低迷と、それを回避するために行った3度に及ぶ高額紙幣廃止等により、フォー・エイトと呼ばれる暴動事件が勃発した。1988年8月8日のことである。鬱積した不満が暴動へと発展したのである。この事件は、一般的には民主化闘争と評価されているが、鬱積した不満を解消するための反政府活動と解したほうが正鵠を射っているだろう。

現在の政権は、アメリカやイギリスの干渉を嫌った軍政による暫定政権となっている。

[トップに戻る](#)

[観光振興策](#)

[ミャンマーの暮らし](#)

[BACK](#)

[NEXT](#)